



3 樹脂が完全に固まったら、二枚貝を割る作業に。カッターで切れ目をいれて貝を割ると……きれいな二枚貝の姿に。



4 カーボンに布を貼りつけ、いよいよ色つけへ。赤い塗料を手際よくのせ、前回公演より鮮やかな色にしていきます。



左がケヤリムシ。



触覚と胴体の色つけ作業のポイントは、どちらも最初に水をたっぷり塗ること。塗料を水にじませることで、きれいなグラデーションになるのだそう。

全国公演に向け、スタッフ一同、力を合わせて作り上げる『アンデルセン』の世界。可愛い衣装やさまざまな工夫がほどこされた小道具にも注目です。

小道具の着ぐるみ製作の様子は次号でもお伝えしますので、そちらもどうぞお見逃しなく。🎭

小道具

『アンデルセン』に登場する童話のひとつである「人魚姫」。「海の魔女」の宮殿へ向かう途中、不気味な海の生き物たちに人魚姫が驚く場面では、俳優が着ぐるみで、海の生き物を演じます。今回の全国公演ではその着ぐるみを一新。小道具工房では、二枚貝やケヤリムシなど、個性いっぱい、だんだんキュートに見えてくる海の生き物たちの製作が行われていました。



左手前が二枚貝。

舞台写真はすべてこれまでの公演より

1 発泡スチロールで作られた原型にカーボンを貼り、貝の形作りがスタート。まずは、小さなカーボンを樹脂をしみこませ、エッジの部分に手早く貼り付けます。



2 次に大きな1枚のカーボンを登場。シワができないよう、樹脂で凹凸部分にもぴったりとくっつけていくと、貝の形が浮かび上がります。



アンデルセン

『アンデルセン』全国公演 衣裳・小道具の 製作現場に密着

3 チュチュのデザインはクラシックなものですが、早替えに対応するため、背中をファスナーやホックで止めるという工夫がされています。



4 着る人の体型に合わせて、メンテナンス後はフィッティングで再調整。胸元のフィット感やチュチュのチュールの浮き加減を確認していきます。



その他の衣裳も丁寧にフィッティングを進めていきます。帽子も髪型に合わせて再調整。

技術の現場より 『アンデルセン』

衣裳

衣裳部屋ではバレエシーンに登場するチュチュのメンテナンス作業が行われていました。前回公演で使用したものを今回の全国公演でも使用できるように、まだ広がっていないチュチュの形をきれいにしていく作業を見てみましょう。



1 まずはチュチュの部分にスチームをあて、形を整えていきます。



2 チュチュが広がりすぎたり、波打ったりしないよう、重なっているチュールとチュールの間に糸を通し、固定。チュチュがふわりと美しく広がります。

東京・西多摩の美術工房、ツエニーにて

5月、劇団四季の小道具スタッフと土屋茂昭さんは、大きな車にあざみ野で製作した着ぐるみを積みこみ、東京・西多摩へ。数体、着ぐるみの製作を依頼している有限会社ツエニーの工房で、色味やフォルムを確認するためです。

イソギンチャク

全国公演では、トラックに衣裳や小道具を積み込んで次の公演地まで運ぶため、出来るだけコンパクトに収納できるような作りが重要。イソギンチャクは触手を取り外し、胴体を折りたたんで運べるようになっています。



タコ

タコの内部には背負子しよいこを入れ、着ぐるみを背負うように着用。タコがフラフラと動いてしまわないよう、前回公演の背負子を調整して使用します。



ヒトデ

今回公演で使用するヒトデ



ただ立つだけではなく、ごろごろ転がってみたり、起き上がったたりして、動きやすさもチェック。その愛らしい動きに、小道具スタッフも思わず笑顔に。



四季の小道具スタッフが試着し、着ぐるみの中からの視界や全体のフォルムを確認。今回のヒトデは前回公演より柔らかい生地で作られ、より動きやすいようになっています。



足の一部には、化学繊維を入れた洗濯ネットを詰め、ふくらとした足に。先端まで詰めてしまうと、足がパツンと張りすぎてしまうため、程よいところまで入れるのが重要です。

アンコウ

土屋さんからは、着ぐるみの色のあざやかさはそのままに、濃淡をつけてほしいとの指摘が。ヒレの白い部分も「あずき色」になるよう、色をつけることになりました。



ツエニーの村瀬直人さん(右)と話し合う舞台美術家・土屋茂昭さん(左)。



今回公演で使用するアンコウ(左)と前回公演で使用されたアンコウ(右)。

小道具と『アンデルセン』の物語の世界

技術の現場より
vol.14 『アンデルセン』

ハンスが想いを寄せるマダム・ドーロのために書いた「人魚姫」。19世紀のオペラハウスでマダム・ドーロ演じる美しい人魚姫が人間の王子への恋心をバレエで表現します。そんな人魚姫を驚かす海の生き物たちの製作過程を先月号に引き続き、追いかけてきました。

あざみ野・小道具工房にて

4月某日、劇団四季の本拠地、横浜・あざみ野の小道具工房では、ロブスターの色つげが行われていました。

1 塗料が布になじむよう、霧吹きで水を吹きかけた後、パランスを見ながら色を塗り重ねていきます。



2 乾かすと色がよりはっきりと出るため、塗っては乾かし、塗っては乾かし……時間をかけて丁寧に色つげを進め、ロブスターは美しい夕焼けのような色に。



3 舞台装置を手がける舞台美術家・土屋茂昭さんが『アンデルセン』で大切にしているのは、物語の舞台である19世紀に存在した素材のイメージを生かし、舞台上に表現すること。2017年の素材を使用しながら、19世紀当時の雰囲気が出るよう、小道具スタッフは温かみのある色を工夫し、はさみや胴体に黒い模様をほどこしていきます。

アンデルセン

あざみ野・稽古場にて

ツエニーでの打ち合わせから数日後、着ぐるみのフィッティングを実施。初めて着ぐるみを見た俳優たちからは感動の声があがり、稽古場は大盛り上がり。和気あいあいとした空気の中、最終調整が行われました。

技術の現場より『アンデルセン』



スーパーバイザー助手の坂田加奈子が巻貝の動き方を指導。「しゃがむような姿勢にすると、より素早く動けるかも」とアドバイスを送ります。

まずは小道具スタッフが着ぐるみの着用方法をレクチャー。



ひょろりと長いケヤリムシは、着ぐるみがすっぽり体を覆うので、動きの邪魔にならないよう、丈を入念にチェック。



俳優たちは鏡で着ぐるみを着たときのフォルムを確認したり、稽古場を動き回ったり……早く着ぐるみでの演技に慣れようと練習を重ねます。

二枚貝を着用予定の俳優たちは、お互いに貝の開き具合、閉じ具合を確認。どのように動けばきれいに見えるのか、体で感覚をつかみます。



現代の技術を使いながらも、ハンスが生きた時代のイメージを大切に作り上げられた海の生き物たち。「人魚姫」のシーンでどのような動きを見せてくれるのか……。ぜひ劇場でお確かめください。

アンデルセン